

子田年譜

特251

148



始



田能村竹田先生畫像

竹田先生の畫像、その門人の手に成りしもの、余が知れる限りに於て、田中介眉〔篠崎小竹題〕・田能村直入〔角田九華題〕・忍頂寺梅谷〔小石禮園題〕及び石瓊州〔後藤松陰題〕の四幅あり、何れも天保七年三月十五日、門人帆足杏雨・後藤碩田主催、豊後鶴崎望京樓に於ける追悼會の席上に展せらる。これを外にして、文政元年、先生四十二歳の時、同郷淵野桂仙筆のものありと聞けど、今傳へられずして、自題の文のみ、その詩集に錄せらる。

先生自寫の肖像に至りては、もと田能村家傳襲のもの、圖書刊行會版『田能村竹田全集』に、その複製を掲げたれど、惜いかな、今原本の所在を失すと聞く。

茲に『竹田年譜』を編するに當り、偶然、舊知の豊後犬飼・毛利貞三氏より、新たに郵示せられたる一幅の肖像あり。その傳來として、甲斐虎山翁の説くところを見るに、先生の舊師淵野禮園の子香齋の門人たる、國宗雲峰の家に、多く先生遺愛の圖書器什を傳へたりし中に、この一幅在り。雲峰の歿後、その家、たま／＼火を失し、蕩然これを烏有に歸せしめしに、思ひきや灰燼を検して、焦爛の餘、纔にその損はれずして、儀容儼然として存するあるを見たりと、是れ豈先生の威靈、儼しくは祝融氏を叱咤して、克く此の神異あるを致さしめたるに非ざるならんや。見よ、その眞相の冉冉として人に迫るもの、實に寓して阿堵の裏に存し、彼の臉邊眉尖の邊り、一點の靈犀、局々我れに通ずるを思はしむるに止まらず、清癯、鶴の如く、風神楚々、澹然として世塵に汚されざるものあるを。或ば思ふ、夫の逸亡に歸せりと傳へらるゝ桂仙筆する所のもの、果して是れなるならんか。而もその筆致の人に絶し、一見して先生の風神に咫尺せしむること此くの如き、亦或は先生の自寫に非ずんば、決してその然るを致さしめざるを想ふに堪へず、姑らく臆見を附して、これを異日に徵するの期あらんことを庶幾す。畫像高さ五尺有半。

この幅の郵寄せらるるや、時恰も『年譜』の排印校正、將に畢らんとするに際し、急遽その複製に従事し、これを世に博くするを得たるは、亦眞に思ひ測らざりし好箇の機縁と謂ふべきなり。〔三月廿八日早天、好尙生〕

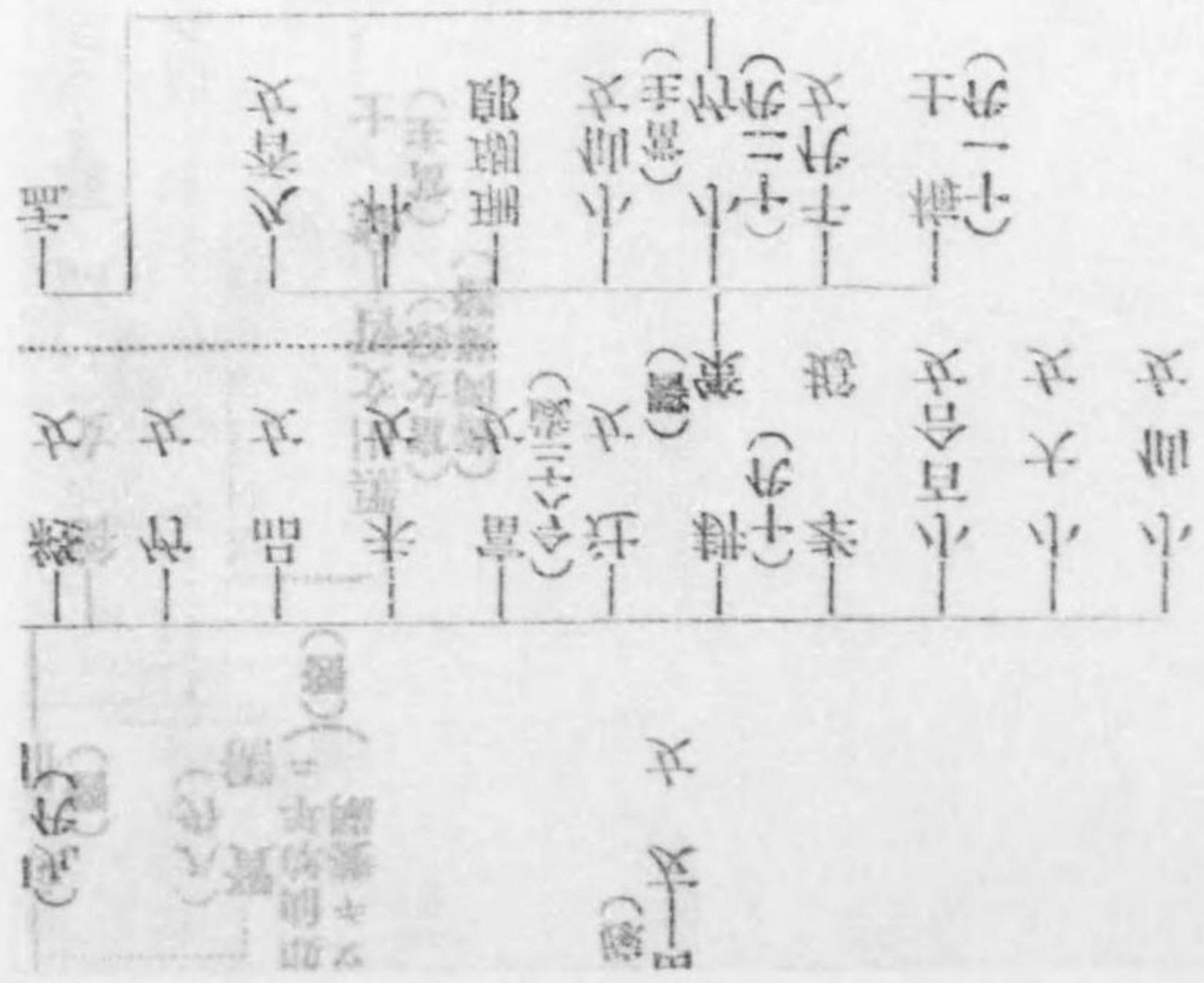


田舎村竹田武主畫齋

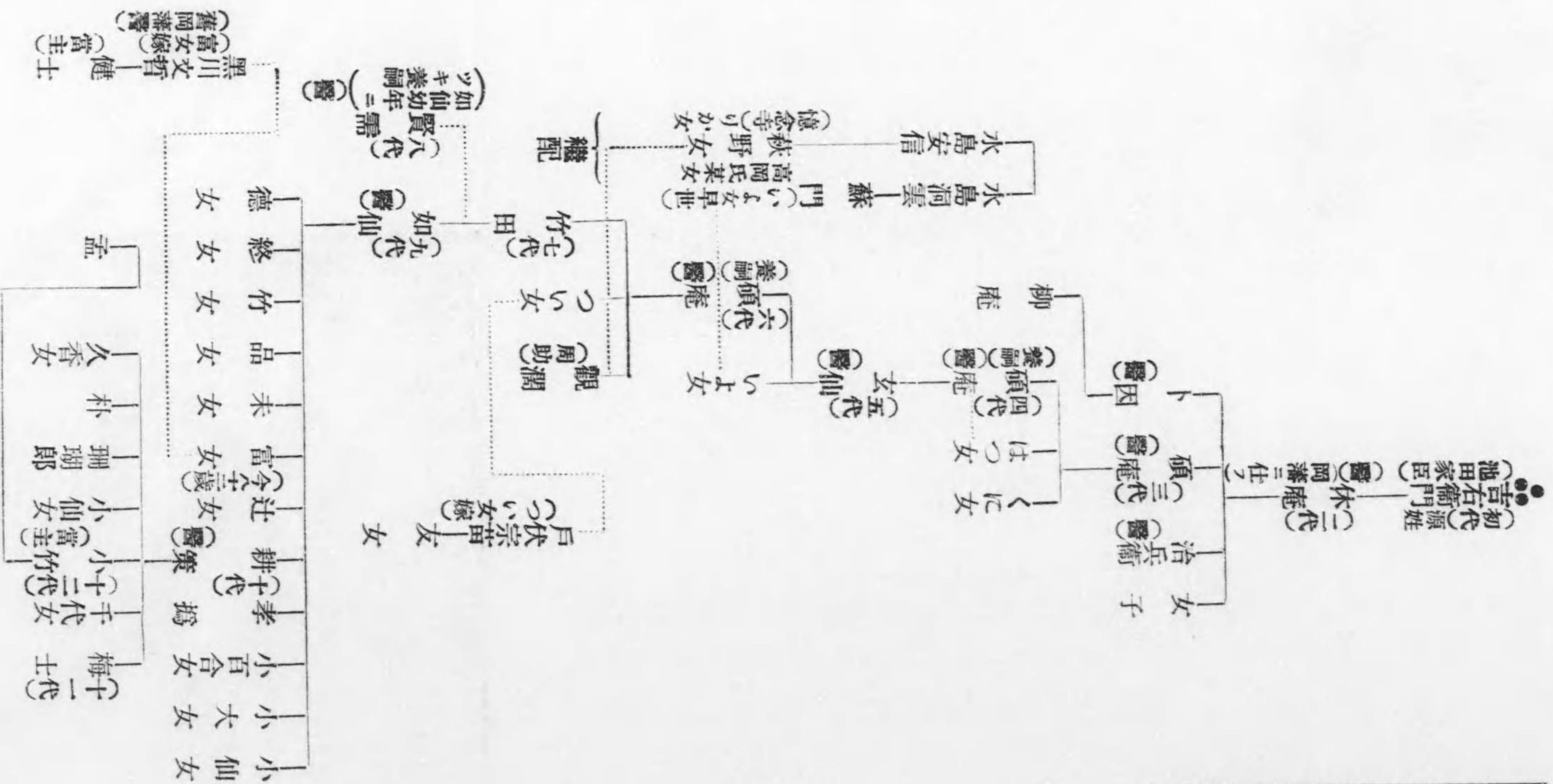
此武主の所するに、水鏡の思ひ断らざりし我箇の難事を備ふべきに。三月廿八日早天、我箇主の
此の謂の難事を云ふ事、初命。「平齋」の替甲子、林二畢るいふ事を二編し、意蓋その難事を備ふ
その限らるるに、書齋高き正只亦半。
此の自言に非ずして、武主の然るべきを思ふに、故に其書を撰べり。故に其書を撰べり。此は異日に
其の言はるるに、而して其の筆意の人を辨し、一見して武主の風神のみしかりしと云ふ事、亦其の武
主の書齋の言はるるに、夫の意を二編せり。武主の風神のみしかりしと云ふ事、亦其の武
主の言はるるに、一編の難事、何れ非ずかと思はるるに、武主の意は、其の言はるるに、果して武
主の言はるるに、武主の言はるるに、其の言はるるに、其の言はるるに、其の言はるるに、其の言はるるに
然して、武主の言はるるに、其の言はるるに、其の言はるるに、其の言はるるに、其の言はるるに、其の言はるるに
宗雲神の家、武主の書齋の圖書器、武主の言はるるに、其の言はるるに、其の言はるるに、其の言はるるに
武主の言はるるに、其の言はるるに、其の言はるるに、其の言はるるに、其の言はるるに、其の言はるるに
武主自言の書齋に至して、武主の言はるるに、其の言はるるに、其の言はるるに、其の言はるるに、其の言はるるに
武主、武主四十二歳の朝、同族階裡封前筆の事ありしに、其の言はるるに、其の言はるるに、其の言はるるに、其の言はるるに
日、門人神泉香雨・翁藤田主、武主の言はるるに、其の言はるるに、其の言はるるに、其の言はるるに、其の言はるるに
「竹田武主」・「武主の書齋」・「武主の言はるるに」・「武主の言はるるに」・「武主の言はるるに」・「武主の言はるるに」
竹田武主の畫齋、武主の言はるるに、其の言はるるに、其の言はるるに、其の言はるるに、其の言はるるに、其の言はるるに

田能村家略系

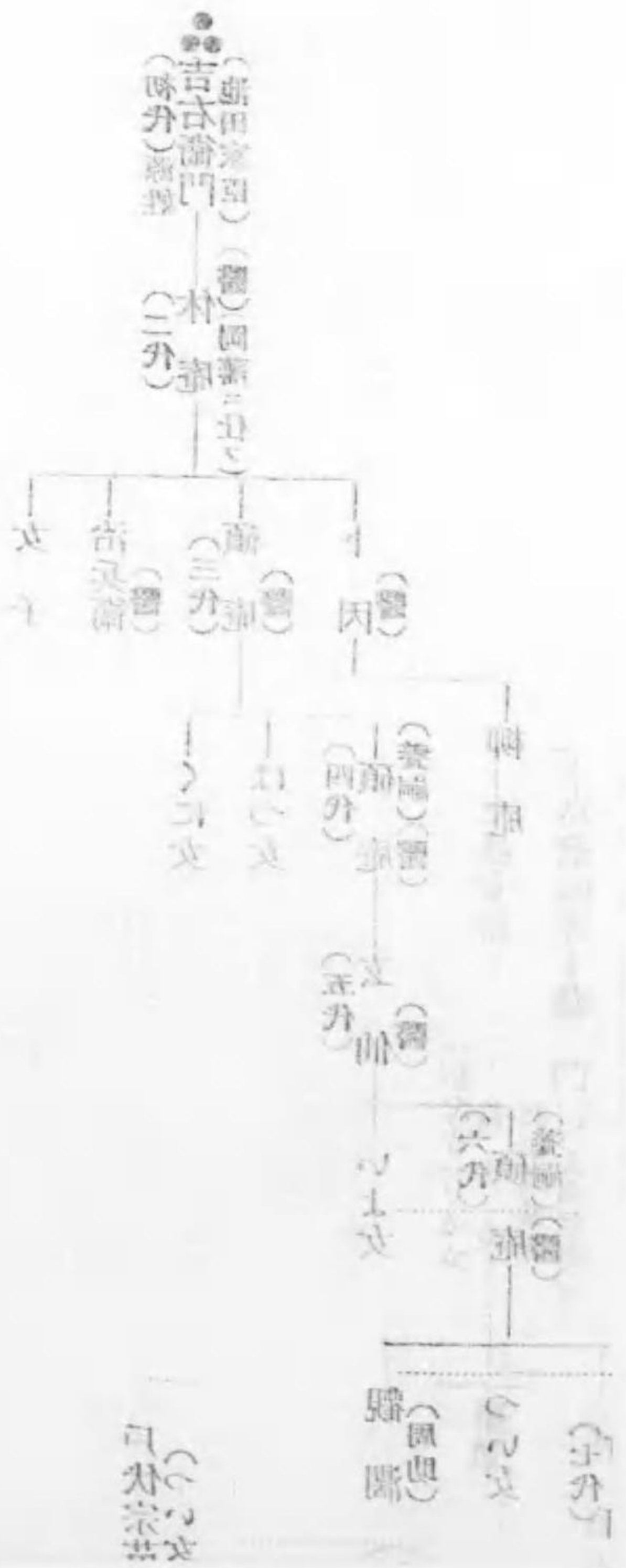
(初代)源姓
吉右衛門
池田家臣
(一) 休
(二) 間



田能村家略系



田翁林家御系



百年記念 竹田年譜

木崎好尚

田能村竹田先生の「年譜」は、明治十六年、その子小花海（如仙）の手に成れる『略年譜』を初見とし、爾後、諸書みなこれを踏襲してゐる、而もその間、誤傳少からず、且その疎漏多きを憾む。こゝに本會に於て、始めて竹田忌（八月繰上、三月廿九日）を修するに方り、明年の百年祭記念の意を以て、新たにこの『年譜』を刊行する。

【表題、「竹田年譜」の四字、自寫「竹田文稿」より集字】

昭和八年三月廿九日

東京 山陽會内 山竹會 刊

天明七年	丁未	藩學問所由學館に上り、後、伊藤鏡河・古田含章の教を受く。▲江馬細香生る。	十一歳
天明六年	丙午	▲游龍〔劉〕梅泉生る。	十歳
天明五年	乙巳	▲小田百谷〔海儂〕生る。	九歳
天明四年	甲辰	父碩庵、藩主手醫師格となる〔博濟館勤務〕。▲小石榿園生る。	八歳
天明三年	癸卯	▲谷口〔與謝〕蕪村歿す〔六十八歳〕。	七歳
天明二年	壬寅	城外七里村英雄寺主道壽に就き、素讀・習字。▲廣瀬淡窓・岡田半江・森荊田生る。	六歳
天明元年	辛丑	▲篠崎小竹生る。	五歳
安永九年	庚子	安藤さだ子〔後、娶る〕生る。▲頼山陽生る。	四歳
安永八年	己亥	▲浦上春琴・中島棕隱生る。	三歳
安永七年	戊戌	▲貫名海屋生る。	二歳
安永六年	丁酉	六月十日〔陽曆七月十三日〕、豊後國大野郡岡藩城下の竹田村〔今、大分縣直入郡竹田町上殿〕に生る、幼稱磯吉。父碩庵〔卅九歳〕・母萩野〔卅二歳〕。▲昨年、池野大雅堂歿す〔五十四歳〕。	一歳

田能村竹田、名孝憲〔又、憲〕・字君舜〔又、君夷〕・稱行藏〔又、堯藏〕、別號九疊僊史・鈍齋・藍水狂客・西野小隱・紅荳詞人等

天明八年	戊申	父の舊稱を承け、玄乘と改稱。學問所にて、目錄賞與。〔下略〕。	十二歳
寛政元年	己酉	姉ついで子〔十七歳〕、藩士戸伏宗苗に嫁す。兄觀瀾、學問所頭取見習となる。この年頃、始めて詩〔子規鳴〕を作る。	十三歳
寛政二年	庚戌	七月十日、祖母よね子歿す。▲橋本竹下生る。	十四歳
寛政三年	辛亥	▲伊藤樵溪生る。	十五歳
寛政四年	壬子	▲十市石谷〔霞村〕生る。	十六歳
寛政五年	癸丑	▲大鹽中齋・渡邊畢山生る。	十七歳
寛政六年	甲寅	六月廿二日、兄觀瀾歿す〔廿五歳〕。八月十三日、母萩野歿す〔四十九歳〕。	十八歳
寛政七年	乙卯	正月十四日、亡兄の後を承け、嫡子願聽許。藩主中川久持侯に謁見。▲圓山應舉歿す〔六十三歳〕。	十九歳
寛政八年	丙辰	この年頃、藩醫唐橋君山、及びその師、藩畫員淵野眞齋・渡邊蓬島等の竹田社・米船社に名を列す。その間、又、倉敷より來寓の平曼容〔自得齋〕に就き、古畫法を修む。▲高久靄厓生る。	二十歳
寛政九年	丁巳	『七事茶録』〔抹茶式〕を手寫す。▲龜山夢硯生る。	二十一歳
寛政十年	戊午	正月廿七日、由學館出勤。家世醫業を廢し、學問専修を命ぜらる。七月七日、『豊後國志』纂修員となり、總裁唐橋君山を助けて従事す。	二十二歳

寛政十一年	己未	四月より十一月に亙り、『國志』資料採訪として、國內巡回。	二十三歳
寛政十二年	庚申	三月十三日、行藏〔淡窓日記には堯藏とあり、普通なるべし〕と改稱。閏四月十一日、繼母りか子入家。十二月一日、『國志』大略脱稿。▲唐橋君山歿す〔六十五歳〕。▲木下逸雲生る。	二十四歳
享和元年	辛酉	五月十二日、『國志』稿本を携へ、江戸行。大坂にて、木村藁葭堂を訪ふ。大津、紀梅亭を訪ふ。六月十七日、江戸著。古屋昔陽・岳東海の門に在り、又、谷文晁に見ゆ。▲北山寒巖歿す。	二十五歳
享和二年	壬戌	五月十二日、江戸より歸藩。八月、再び資料採訪巡回。同月、「湖上清隱圖」を作り、隱逸の素志を寓す。▲木村藁葭堂歿す〔六十七歳〕。	二十六歳
享和三年	癸亥	二月廿三日、父碩庵歿す〔六十五歳〕。四月十五日、家督相續〔十二人扶持・組外馬廻格〕。七月、『國志』成る。秋、「雲山草堂圖卷」を作り、隱志漸くに動く。十一月、君山遺稿『豊後〔古〕風土記箋釋』の校訂を了る。十二月一日、『國志』淨寫本、藩庫に納めらる。	二十七歳
文化元年	甲子	八月、『國志』の幕府納本了り、又、學問所に複本を納む。十月十五日、右、賞與〔藩主紋所黒羽二重小袖〕。十一月・十二月、熊本遊學、村井琴山・高本紫溟に従遊。▲高橋草坪生る。	二十八歳
文化二年	乙丑	正月、痼疾の眼病療養を兼ね、京都遊學發程。博多にて龜井南冥に會す。長崎にて吉村迂齋塾に寓す。熊本にて琴山・紫溟の外、大城壺梁の門を叩く。下ノ關にて廣江殿峰を訪ふ。大坂著後、河内・大和の山陵巡拜、見取圖を謹寫し、又、君山遺稿〔前記〕開版。學問	二十九歳

文化三年	丙寅	所頭取伊藤鏡河へ書翰、「經學は止め、詩ばかり學び申候」とて、大に詩詞の唐本を購求す。閏八月、入京、下立賣阿彌陀寺に寓居苦學。この年頃、『山中人饒舌』略脱稿。▲後藤碩田生る。	三十歳
文化四年	丁卯	正月、『填詞圖譜』開版、前中書王兼明親王以來中絶せんとする詩餘の復興に志あり。又、この際、『定正、本事詩』開版。皆川淇園に入門の豫定を變じ、村瀬栲亭〔七十一歳〕の塾に入る。その間、眼病療養の爲、大坂に下り、浦上玉堂〔六十二歳〕と相識る。秋、歸京、大雅堂二世僧月峰・武元登々庵・中島棕隱・梅辻春樵等と訂交す。	三十一歳
文化五年	戊辰	正月十三日、栲亭塾にて、上田秋成〔七十三歳〕と相會し、煎茶談を聴く。五月九日、白杵藩士安藤吉大夫妹さだ子〔廿七歳〕と結婚願聽許〔やがて歸藩の後學式〕。十月、下坂、生玉持明院にて、玉堂と同寓。十二月廿九日、歸藩。この際、由學館頭取並となる。	三十二歳
文化六年	己巳	三角亭〔損亭〕を庭中に築く。十二月廿日、太一郎〔後、太一、名孝矩・字躬耕・號小花海・醫名如仙〕生る。	三十三歳
文化七年	庚午	六月、「絶崖懸泉圖」を、高松の梶原藍渠〔橋本竹下妻の父〕に贈る。▲上田秋成歿す〔七十六歳〕。 春、熊本遊學、琴山・紫溟に従遊。七月、「蘭竹詩畫冊」を大窪詩佛に贈る。十月、入京、「竹田莊詩話」成る。 閏二月四日、發程、京都へ向ふ。備後神邊に。菅茶山〔六十四歳〕を訪ふ〔頼山陽、京都へ向ひし直後〕。伊丹を経て、大坂に入り、持明院に寓す。三月、入京、栲亭塾に在り。再び下坂、持明院にて山陽	三十四歳

文化八年	辛未	〔卅二歳〕と初対面、『風竹簾前讀』の題詩を求む。六月、歸京。武元登登庵の『行庵詩艸』序を作る。高松の鈴木三橋〔名詔・字九成・稱理兵衛、四十四歳〕・小香夫妻と相識る。七月、和歌山に入り、野呂介石を訪ふ。八月大坂に在り。九月、歸藩。十一月十九日、城下に百姓一揆起る、藩主に建言して、庶政改革を論ず。▲釧雲泉歿す〔五十三歳〕。松村月溪歿す〔六十歳〕。	三十五歳
文化九年	壬申	二月十七日、第二建言書を上陳す。五月廿五日、隱居願を差出す。「私儀、幼年より多病にて、……十二三歳頃より耳相煩らひ、今に一日に、一兩宛うみ出申候て、次第に遠く相成……眼氣悪敷。」▲紀梅亭歿す〔七十歳〕。	三十六歳
文化十年	癸酉	三月十二日、隱居願聽許、由學館詩文會頭として散職に在り、休息料毎年二人〔後、七人〕扶持。嗣子如仙、幼少に付、惠良原の醫衛藤信秀子賢需を養嗣とし、やがて大坂へ向ふ。六月、著坂、持明院に寓し、やがて歸郷。閏十一月、『山中人饒舌』稿本整理。	三十七歳
文化十一年	甲戌	五月、大坂へ向ふ。下ノ關にて、廣江殿峰子秋水を伴ひ著坂、秋水を山陽塾に托す。十月、大坂發船。十日、風波を避けて、鞆津假泊中、山陽が廣島より歸京の途、三島怡齋宅〔對醉僊樓〕に在るを聞き往訪一泊。やがて發船歸郷。	三十八歳
文化十二年	乙亥	▲村井琴山歿す〔八十三歳〕。	三十九歳
文化十三年	丙子	夏、府内〔今、大分市〕に遊ぶ、『豊府紀游』成る。九月、再遊『百活矣』成る。十一月三日、四十壽賀記念として、四方諸家寄贈書	四十歳

文化十四年	丁丑	畫の整理了り、『竹田莊藏書畫記』成る。▲頼春水歿す〔七十一歳〕。外伯父水島蘇門、江戸藩邸にて歿す。	四十一歳
文政元年	戊寅	二月、畫像自題詩成る、「耳聾不 _レ 得 _レ 聞 _二 毀譽。目眇奚能辨 _二 妍媸。如 _二 風狂 _一 又如 _レ 顛。惟迂惟拙更 _レ 惟癡。」の句あり。六月、自から詩集を編す〔郷友角田九華の序〕。九月廿七日、養嗣賢需隱居、如仙〔十一歳〕家督を承け、太一と改稱。十月廿三日、九州旅行中の山陽を迎へ、廿六日、加島富上の別莊〔洗竹莊〕にて、九華と共に詩會、廿九日、春曦樓〔玉屋〕にて、送別宴〔十一月一日、山陽、日田へ向ふ〕、その遊寓中、連日の晤談を筆記して、『卜夜快語』を作る。▲村瀬栲亭歿す〔七十三歳〕。武元登登庵歿す〔五十二歳〕。岡田米山人歿す〔七十五歳〕。	四十二歳
文政二年	己卯	三月六日、京都の印人松本瘦鶴〔黃鶯〕來訪、「青綠山水を贈り、印を論ずる文を題す。閏四月、日田に遊ぶ。五月廿三日、隈町森荊田宅にて、廣瀨淡窓〔卅七歳〕と會見。六月、歸郷。	四十三歳
文政三年	庚辰	二月廿九日、庭内の書倉〔藏二閣〕成る。七月、藩士岩瀬小平治の爲に、茶人三十六家畫像を作る。▲浦上玉堂歿す〔七十六歳〕。	四十四歳
文政四年	辛巳		四十五歳
文政五年	壬午	閏正月廿四日、杵築へ向ふ。乙津〔後藤碩田宅〕を経て、杵築に入り〔高橋草坪入門〕、十市石谷に會し、渡邊玉仙の上京を送るに「魚介圖」を寫し、山陽・春琴の次韻を求めしむべく、近況七律を自題す。	四十六歳

		<p>三月四日、別府に入る。十日、府内を経て、三佐著。十三日、戸次。十三日、歸宅。『黄築紀行』成る。</p>	
文政六年	癸未	<p>春、如仙、及び草坪〔廿歳〕を伴ひ、京都へ向ふ。神邊に茶山を訪ひ、填詞〔秋聲館集〕の評閱を求む。尾道滞留の上、四月、大坂に入り、下坂中の山陽に會し、五月十日、入京。十一日、青木木米〔五十七歳〕・月峰〔五十四歳〕を訪ひ、月峰の手により、雙林寺門前妙玄庵を借り、十三日、その寓居〔愛山居〕を定む。六月四日、山陽・雲華の來訪を迎ふ。七月七日、榎園に誘はれて、三本木いばらき屋〔清輝樓〕に小宴、歸途、二條大橋にて、木米を訪うて還れる山陽と、茶店に憩ひ、星夕の雅興に耽り、やがて「柳陰閑話圖」成る。廿七日、山陽に招かれ、山水圖合作。八月十四日、物集西阜の手により、小川夷川に寓居を移す。山陽・榎園・春琴・百谷、及び西阜を招き、中秋の宴。十六日、榎園の主催にて、再び清輝樓會飲。〔以下、諸友會合、略〕。この際、『隨緣沙彌語錄』成る。十月十六日、山陽の主催にて、朱雀丹波屋の送別宴開かる。十二月、二條皆山樓の白雪社忘年会に列す、歌妓飛珊の爲に、「置ごたつ」の曲を作る。廿七日、橋本竹下の爲に、名古屋より取り出せる施溥山水幅を社中に展觀せしむべく、春琴の案内にて、小川的那波南陽宅に會し、山陽が強いて幅を獲んとするを、社中と共に仲裁す。▲淵野眞齋歿す〔六十四歳〕。</p>	四十七歳
文政七年	甲申	<p>正月六日、山陽宅〔水西莊〕に留別。十六日、發程、如仙・草坪同伴。二月十三日、大坂、發船、廿六日歸郷。四月、帆足杏雨〔十五歳〕入門。九月、米庵・門人山内香雪來訪、爲に「香雪齋圖」を作る。十月廿三日、如仙、廣瀬淡窓〔咸宜園〕に従學。</p>	四十八歳

文政八年	乙酉	<p>先輩室不同齋〔文政五年歿す、七十五歳〕の碑文を撰す。二月、日田へ向ふ、門人〔眞齋子〕淵野天香を伴ふ。廿三日、隈町森秋艇宅に寓す。廿三日、森仁里と共に淡窓を訪ふ、門人三宅瘦仙等入塾。廿九日、旭莊〔十九歳〕、淡窓名代として來見。三月三日、「桃花圖」を淡窓に贈る。甘木・秋月・太宰府を経て、下ノ關に渡り、廣江家に寓す。八月十八日、日田に還り、森荆田宅〔竹香書屋〕に寓す。十二月廿三日、歸郷。▲天香、廣島にて歿す。</p>	四十九歳
文政九年	丙戌	<p>春、庭中に補拙廬を築く。五月、尾ノ道へ向ふ。七月七日、茶山を訪ふ。八月十九日、尾ノ道發船。宮島を経て、廿八日、下ノ關著。廿九日、廣江秋水を伴ひ、小倉著。二日、博多に入り、松永花遁〔四十五歳〕を訪ふ。九月七日、長崎著。九日、茶客仙胤より、福州傳士然傳來の『茶訣』を贈らる。江芸閣の歸船を送る。十二月廿六日、熊代秋琴宅〔如是江山樓〕に寓す。草坪、竹田莊に來寓。</p>	五十歳
文政十年	丁亥	<p>長崎に在り。正月八日、道幸楓山等諸友と新年宴。二月、春徳寺鏡翁を訪ふ。四月、「松溪聽泉圖」を、村尾半仙に贈る。六月十九日、秋琴の爲に、「群雀圖」を留む。閏六月三日、蘭船入港見物。八月廿三日、平戸光明寺主癡童來訪。木下逸雲に、「風雨渡谿圖」を贈る。十月、阿波の矢上快雨を伴ひ、熊本へ向ふ。十月、熊本より鹿兒島へ向ふ。十一月、肥後水俣の深水春山宅にて、山陽留贈の橋窓圖を展し、同じく圖を作り、更にその詩韻に次す。鹿兒島にて、蛟島雲嘯の爲に、「梅谿閑居圖」を作る。藩士西村三十郎より、唐刻「九峰無戒衲子」の古印を贈らる。十二月、熊本に還り、「琴山子」村井蕉雪〔古香〕宅に寓す。やがて歸郷。遊中、題畫詩文『自畫題語』前編、繼で成る。▲菅茶山歿す〔八十歳〕。</p>	五十一歳

文政十一年

戊子

四月、上京送別として、老職田近藏主〔凌雲〕邸〔優游園〕に招かる。如仙を伴ひ京都へ向ふ。戸次を経て、三佐發船。五月、著坂、入京に及ばずして、やがて歸郷。九月十八日、熊本へ向ひ、廿日著。廿七日、辛島鹽井〔七十七歳〕の招飲、廿九日、蕉雪に留別。十月二日、歸郷、『暫游日記』成る。十二月廿九日、清人郭祥伯の『靈芬館集』を抄せる『今才調集』の解題を作る。是より先、大鹽中齋の爲に、『王陽明畫像』を作り、この日、中齋〔卅五歳〕、これを掲げて三百年祭を洗心洞に修す。▲野呂介石歿す〔八十二歳〕。

五十二歳

文政十二年

己丑

二月十五日、藩主中川久教侯の命により、『華陽歸馬』・『桃林放牛』の對幅を作る。四月十日、草坪・如仙を伴ひ、京都へ向ふ。高濱寄泊、梅津寺に遊ぶ。『蓬窓幽興帖』を作り、古山納琴に贈る。四月卅日、兵庫に著し、有馬を経て、五月二日著坂、京町堀の同郷綿屋文作方〔芸香堂〕に寓し、『今才調集』開版の事に従ふ。如仙入京、種園の醫塾に入る。六月廿五日、山陽・榎颯一行、及び小竹と共に、草場珮川〔四十二歳〕に招かれ、鍋島邸にて天神會の渡御見物。山陽の示せる『日本樂府』讀評、やがて成る。七月、『竹田莊茶説』跋成る。七月七日、〔米山人以來の舊説〕岡田半江〔四十八歳〕を訪ふ。八月十五日、『竹田莊泡茶訣』跋成る。九月十九日、『今才調集』版下手書。この際、『自畫題語』前編版刻。九月、繼母りか子、重病、如仙歸郷。『冬日閑居圖』を小竹に贈る。十月廿二日、山陽一行、及び小竹・後藤松陰と共に、草坪を伴ひ、箕面觀楓の爲、伊丹の坂上桐陰〔劍菱醸家〕に會し、翌日、登山の上、留まりて有馬・池田に遊ぶ、『目擊佳趣冊』やがて成る。十二月、入京。十九日、繼母死去〔六十九歳〕。廿四日、山陽を訪ひ、その子支峰〔七歳〕の爲に、『東山即目圖』を作る。▲伊藤鏡河歿す〔七十八歳〕。森川竹窓歿す〔六十五歳〕。

五十三歳

天保元年

庚寅

二月、京都發程、廿三日歸郷。隨筆『屠赤瑣瑣錄』を整理す。五月如仙〔妻瑞枝を娶りて後〕、上京發程。七日、鏡翁・逸雲來訪。廿日、昨年船中の作『船窓小戲冊』完成。六月、詩集に九華の序成る。八月、『今才調集』刻成〔山陽・小竹序〕。十月、府内に遊ぶ。十一月草坪・瘦仙を伴ひ、京都へ向ふ。十二月二日、著坂。醫松本醉古の爲に、『亦復一樂帖』〔初め雜畫冊と題す、十圖〕を作る。廿二日、入京、種園の別邸用拙居に寓す。廿四日、山陽を訪ひ、『雜畫冊』の跋を求む、山陽、「その愛すべきを覺え、遂に奪うて我が有とす」と言ひ、これを返さず。卅日、山陽を訪ひ、越年。

五十四歳

天保二年

辛卯

元日、用拙居に還る。正月十九日、山陽宅に一宿、『一樂帖』に三圖を添へしは、この時なるべし。廿日、下坂。廿七日、醉古の爲、更に『山水十景冊』を作る。『茶説圖譜』開版。二月四日、半江を訪ふ。三月十日、『十景冊』を携へ、山陽の跋を求むべく、入京。十一日、跋成る。―『竹田を煩はして、再び後帖〔十景〕の如きを作つて我に與へ、再び前帖〔一樂〕の如きを作つて醉古に與へよ。』十二日山陽に誘はれ、雲華、及び細川林谷同伴、嵐山に遊ぶ。十八日、如仙を拉へて歸郷の途に上り、四月、歸郷。如仙やがて又、入京。七月十五日、是より先、山陽の囑により、この日、『一樂帖』の跋に代へ、山陽觀の種々相十二則を書す。十一月、濱脇温泉に遊び、荒金吳石の爲に、『暗香疎影圖』を作る。十二月十五日、『今才調集』〔秋、開版〕を藩侯に獻す。

五十五歳

四月十八日、『印譜』を製し、各その由来を記す、ことし元日、山陽刻贈の『小白石翁』亦收めらる。雲華來訪。五月六日、昨年作『梅

天保三年 壬辰

花雙鶴圖」の山陽題詩成る、この日、自題の外、雲華・九華の詩あり。六月一日、來寓中の杏雨を伴ひ、府内へ向ふ。十八日、戸次舟遊、雲華同伴、「曲溪複嶺圖」二幅を作り、一は帆足家に留め、一は雲華に贈る。七月四日、發程、歸郷。九月、杏雨を伴ひ、京都へ向ふ。古城正行寺（雲華の自坊）に留寓。中津同上。岸井に、曾木墨莊を訪ふ。野本白巖、來訪。山陽の計（九月廿三日歿す、五十三歳）に接す。小倉留寓。下ノ關、同上。十二月十五日、壇ノ浦舟遊。卅日、山陽追福の爲、「白描觀音」を寫す。

五十六歳

天保四年 癸巳

下ノ關（松原住吉寓）に元旦を迎へ、周文の畫を掛けて、綠瓷瓶に白梅一枝を挿み、「瓶梅圖」を作り、填詞を題す、舊臘、旅資を郷里に求めしに、囊を傾けて、この二物を獲、その喜びを妻さだ子に消息す（十三日書翰）。二月、雲華の還曆を賀し、「菊圖」に和歌を題して贈る。三月三日、舟遊、「六連島圖」を作る。三月十五日、尾ノ道を経て、著坂。廿日、入京、用拙居に寓す。廿一日、山陽遺宅を訪ふ（下略）。四月八日、樺園・春琴・杏雨等と、鬪茶會を催す。廿九日、木米を訪ひ、「松巒古寺圖」を贈る（山陽の遺囑、その人すでに亡く、轉贈。木米、五月十五日歿す、六十七歳）。五月、如仙（樺園塾にて醫術修了、歸藩後、由學館蘭法醫術會頭となる）及び杏雨を伴ひ、發程。十一日、大坂にて、頼津庵（卅三歳—江戸より廣島への歸途）に會す。十七日、七尾の巖城西地（山陽門人）に招かれ、小竹・松陰同伴、大川舟遊。七月、發船、歸郷。杏雨畫に題詩の「京遊詩畫帖」成る。田近凌雲の七十壽意「鐵幹生春圖」を作る。十一月廿一日、門人三宮小虎（直入）を伴ひ、大坂へ向ふ。三佐港越年。

五十七歳

天保五年 甲午

正月十一日、三佐舟遊。乙津の碩田宅留寓。廿九日、發船。二月二日、尾ノ道著、竹下宅留寓。五日、茶客内海自得齋を訪ふ、春琴・竹下同席。卅日、竹下・夢硯同伴、淨土寺に遊ぶ。八月一日、瓶花枯枝を千光寺畔に埋め、「瘞紅碑」を建つ。「尾道遊覽志」起稿。廿日發船。廿六日、著坂。小虎を大鹽塾（洗心洞）に托し、往訪頻々。九月十五日、梅檀木橋の残夜水明樓にて、小竹訥堂（竹陰）父子・松陰・吳北渚・高安杏山等と詩會、北渚時に「山中人饒舌」版下を寫す。十一月廿一日、三津濱松田浩齋の爲に、「九霞樓遠眺圖」を作る。やがて發船歸郷、廿五日、長孫女（如仙長女）小仙生る。▲梶原藍渠歿す（七十三歳）。廣江秋水歿す（五十歳）。

五十八歳

天保六年 乙未

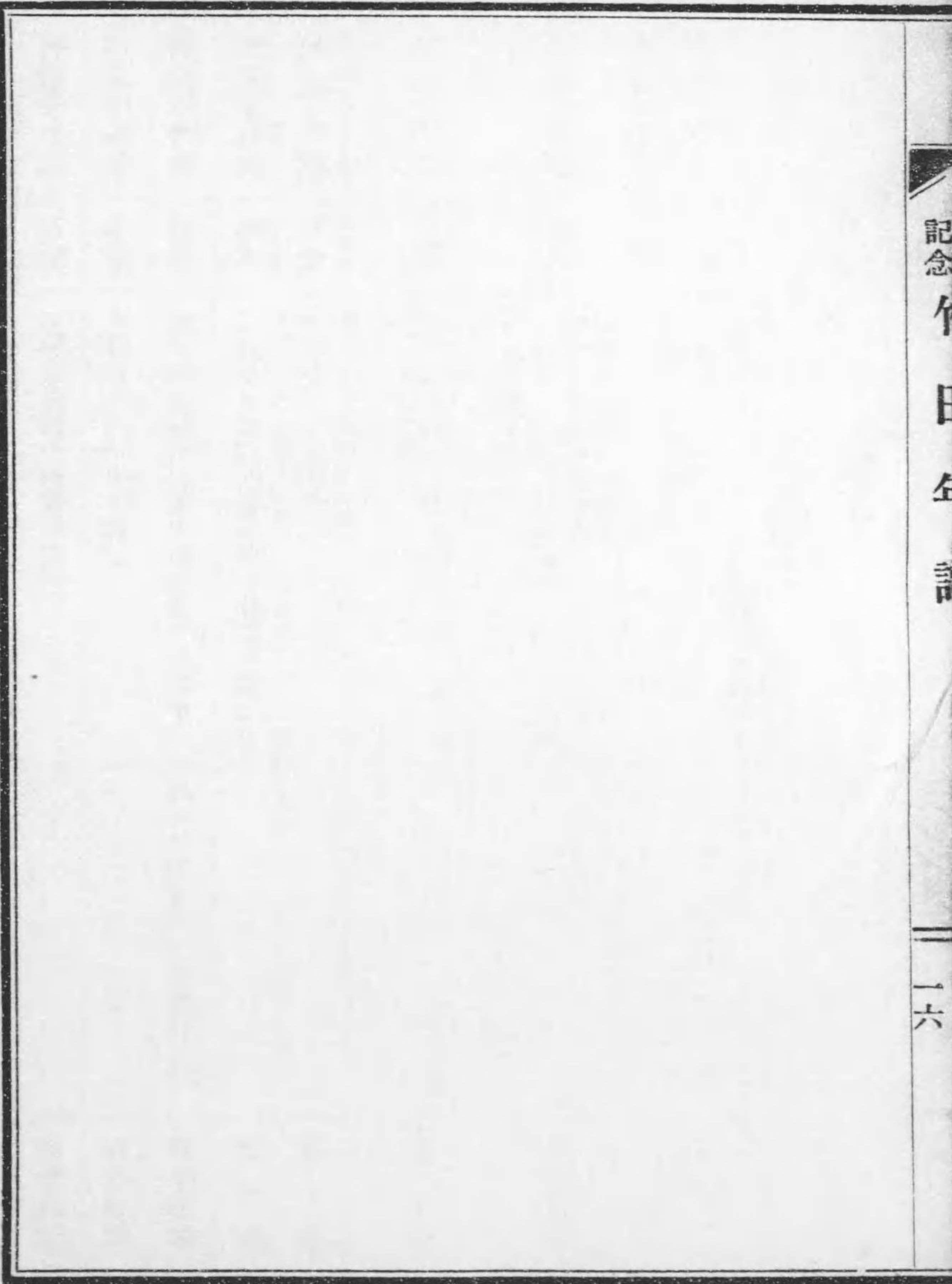
四月、發程、大坂へ向ふ。五月、鶴崎望京樓にて、碩田主催の送別展觀席に臨む。卅日、三佐發船。六月八日、著坂。廿三日、中齋へ往訪、「春堤月夜圖」を作り、王陽明の詩句「月上春堤一夜四更」を題贈。七月上旬より、中暑の氣味。十一月、吹田村代官井内左門（徑雨）邸内に避暑。廿三日、病を冒して大坂へ赴き、翌日引返し、臥牀。閏七月三日、如仙へ書翰、胸痛胸悶の病狀を報す。「吹田村病居圖」を作る。十四日、如仙へ、「誤喫三茄子未熟、絶無三食氣」と報す、病を興して、大坂藩邸内に還る。十九日、小竹・西地、病氣見舞。八月四日、如仙、發程、大坂へ向ふ。十二日、行違ひに、如仙へ、至急上坂の事、發信。十四日、元瑞の來診を求む。十六日、如仙、著坂看護。小竹、來問。廿九日、元瑞來診。この日、歿す。絶筆「不死吟」に、「一昨不_レ死又昨日。昨日不_レ死又今日。今日不_レ死又明日。若_レ許不_レ死日又日。騰々々不_レ死。踏盡今年之三百六十日。又明年之三百六十日。」

五十九歳

歿後

天保六年	乙未	八月卅日、大坂天王寺口繩坂淨春禪寺に營葬。墓碑、小竹の題表、「竹田先生墓」法名「隨緣院竹田補拙居士。」九月廿六日、淡窓、訃に接し、「懷舊樓筆記」に紀事を載す。	
天保七年	丙申	三月十五日、鶴崎望京樓にて、杏雨・碩田主催、追悼會、遺愛の古書畫、並に諸家寄贈の作展觀、目錄「筆花墨香供養」帖成る。八月廿九日、櫻園、用拙居にて同上、春琴等諸友參集。同日、竹田莊にて一周忌辰法要。	歿後二年
天保十年	己亥	二月、「自畫題語」後編」開版。八月廿九日、望京樓にて、五年祭記念、追悼展觀席。	五年
天保十一年	庚子	閏八月廿九日、竹田村洗竹窓にて、門客松岡蝶庵主催、追悼會。	六年
弘化元年	甲辰	七月、郷里胡麻生丘「吳蒙嶺」に、遺髮塚成る、碑型・題表、すべて大坂の墓碑に象どる。	十年
安政元年	甲寅	四月、「山中入饒舌」再刻。	二十年
安政六年	己未	八月廿五日、廿五回忌辰記念として、如仙、「竹田印譜」を編す。	二十五年
文久二年	壬戌	九月十五日、妻さだ子歿す（八十二歳）。	二十八年

明治十二年	己卯	『竹田畫譜』前編開版。	四十六年
明治十四年	辛巳	九月、「填詞圖譜」翻刻。	四十七年
明治十六年	癸未	春、如仙、「竹田先生略年譜」を編す。八月、「竹田畫譜」後編開版。	四十九年
大正十三年	甲子	二月十一日、贈從五位の位記を賜はる。	九十年
昭和九年	甲戌	百年祭。	百年



昭和八年三月十五日印刷
昭和八年三月廿九日發行

百年紀念竹田年譜與附
定價金五拾錢

著者 木崎好尚

東京市四谷區左門町四五

發行兼印刷者 山竹會

代表者 神郡敬三

東京市四谷區左門町四五

印刷所 民友社印刷所

東京市京橋區銀座西八丁目五番地

不許
複製

發行所

東京市四谷區左門町
四五番地山陽會內

山竹會

終

